季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻31号

秋号

2008

9,10,11月

シリーズ 上越（かみえちご）後のかたち「上越学」への試み

縄文人が作った 頸城の「自然」

「自然の構成者」としての未来への責任

巻頭エッセイ◉このまちのこと

直江津感傷旅行——母の失恋

この人に学べ

彫刻家 滝川美堂

【文学の旅】

◉中世の文化人

「越後府中」を訪ねる

三人の旅人。

季刊 直江の津 第31号 秋号
2008—9・10・11

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
直江津感傷旅行 — 母の失恋
杉山百合子　3

■シリーズ上越後のかたち
縄文人が作った頸城の【自然】
「自然の構成者」としての未来への責任
五百川 裕　4

■文学の旅
「越後府中」を訪ねる三人の旅人　18

■この人に学べ　彫刻家 滝川美堂　22

■「思い出の黒井村」（下）　松本恵子　13

■カメラの眼　20

■読書びと
忘却の河　福永武彦著　24

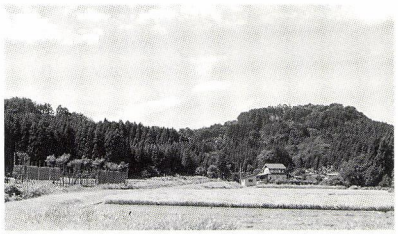
■建物さんぽ　26

■アルバムの一枚　30

■投稿　11

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



春日山城下の実りの秋

♣巻頭エッセイ

杉山百合子さんのこと

東京目白に生まれる。10歳から父の転勤で札幌へ。
立教大学文学部英米文学科卒。
元立教大学米人教授のもとで秘書兼通訳として働く。
昭和39年結婚により高田へ。
元上越市教育委員長。
夫とともに大手町在住。
3人の息子の家庭に4人の孫あり。

直江津感傷旅行 ― 母の失恋

杉山百合子

初めての直江津は五十年さかのぼる。高校二年の夏は、体調を崩して学校を休んだまま夏休みに入った。翌年の受験を控えて、大学選びで父と意見が合わず、悩み始めた時期でもあった。大学は地元の札幌で、と父は言い、私の目指す学校は東京にあった。母はいわば中立の無言を通していた。

そんなある日、父が「お母さんと二人で長野へ遊びに行ってきなさい」といきなり切り出して、二人分の切符を手渡してくれた。長野は母の実家である。すでに有無を言わせぬ段取りができていて、父の計画はいつもそんな具合だった。「行ってきなさい」と簡単に言うが札幌から長野へは当時急行列車を使っても二十四時間の旅だったと思う。体も心もやや病んでいた私には気のすすまぬ旅であった。

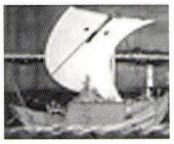
青函連絡船を奥羽本線に乗り換えて裏日本を列車でひたすら走る長い旅だった。疲れて着いた直江津では、母の提案で一泊することになった。駅で紹介された宿は海に面していた。海水浴のシーズンだったはずだがそんな様子は記憶にない。自分以外のことにあまり関心が向いていなかったのだと思う。

長野市で育った母には、直江津の海は憧れだったようだ。長野に近づいていながらも直江津で一泊する理由を母はそんな風に話した。海の満天が星で埋まるころ、窓辺で母がポツリと話し出した。

「昔、好きだった人がいてね、直江津の人だった。十七のときだったからお互い打ち明けたわけではないけど、気持ちは分かっていたの。実家の事情があって彼は直江津に帰ることになって…縁がなかったね」そのとき十七歳だった私は息を止める思いでそれを聞いた。「なんでそんな話を私にするのよ」といいたい気持ちだけだったが、私は一言も言わずに黙っていた。今の子どもだったら「お母さん追いかければよかったジャン」なんて言うだろうか。床のなかでも目はさえて、母の実らぬ恋を思い巡らした。

翌朝の母は、あっけないほどいつもの母で、長野行きの時間を確かめたり、お土産を買い求めたりあわただしく振舞った。駅への道にもこれといった思い入れあるわけでなく、かつての思い人をしのぶ様子はさらになかった。

長野までの汽車の中、私は少しむっとしていたかもしれない。母にどう接していいのか分からない気持ちもあったが、大学選びは自分の考えで推し進めよう、とばかり強く思うようになっていた。後になって、あれは「後悔のない人生を送りなさい」という、母の「仕掛け」だったのではないかと、ふと思うこともあった。



シリーズ
上越後（かみえちご）のかたち
「上越学」への試み

縄文人が作った頸城の【自然】

「自然の構成者」としての未来への責任―

上越教育大学准教授　五百川　裕



三方を穏やかな山並みに囲まれ、北に海を望む頸城の地は、どの分野の歴史を掘り起こしても、山海の豊かな恵みに与（あずか）り、交通の要路であり、越後の国の都に相応しい地であったという思いを深くせざるを得ません。しかし、この「頸城（久比岐）」には「なぜ」あるいは「謎」が多すぎます。その「なぜ」「謎」に迫り、明らかにしていくことこそが、わが上越の未来への展望を切り拓く「学」ではないかと思います。



信越トレイル
信越トレイル沿いに残るブナ林。ブナは灰褐色でまだら模様の特有の樹皮を持つ。



（図 1）頸城の現存植生図
宮脇昭（1985）の中部地方現存植生図の一部を抜粋。以下の凡例は名称を改変して記載。
18：ブナ林
27：風衝・崩壊地低木林
30：オオシラビソ林
32：ダケカンバ林
41：アカマツ林
42：スギ林
49：水田雑草群落
50：ミズナラ林
52：コナラ林
53：カラマツ林,
55：伐採地草本植物群落
62：集落・市街地

自然とは

「自然」とは、「天然のままで人為の加わらないさま」であるとの定義（広辞苑）に従って考えると、現代の地球上には人間の影響を全く受けていない自然の事物などほとんど無いのではないだろうか。人間を自然と対置させて考えるとするならば、人類の繁栄は即ち自然の減少を意味することは当然である。厳密な定義はさておいて、いわゆる自然を感じる景観というと、人それぞれに思い浮かべるものがあるが、温暖適潤な島国に住む日本人にとっては、緑の大地や青い海は、ごく普通に意識できる自然景観の典型ではないだろうか。また、ここ雪国上越においては、冬の白い大地にも大いに自然を感じさせられるが、それは春に再び広がる緑の引き立て役でもある。この大地を覆う緑は、言うまでもなく植物であり、少し気を付けて見てみると、種類や大きさ、季節などにより緑の葉の色合いは微妙に異なり、花や果実の時期ともなればさらに個性を発揮して、その多様性がまた自然さをより感じさせてくれるのである。

植生とは

植物の生えている様子のことを学術用語では「植生」と表現するが、現在の頸城（ここでは上越市および妙高市を考える）の植生は、やはりほとんどが厳密な意味では自然なものでは無い。植生の現状を調査して地図上にまとめた現存植生図というものが全国で作成さ



コナラ林
カスミザクラやアオハダが混じるコナラ林。かつてはコナラ以外の低木(柴)は刈り取られ、このように茂ってはいなかったはずである。



ヤマツツジ
コナラ林で咲くヤマツツジ。薄暗い林床で蛍光を放つような花が美しい。





オクチョウジザクラ
オクチョウジザクラの花。早春の木々の開葉期に真っ先に咲きはじめる山桜である。



上　スギ
放置されたスギ植林。上越教育大学構内のこのスギ林は、30年くらい前に植林されたようだが手入れが行き届かず、細い木が密生している。
下　コナラ
コナラの果実(ドングリ)。ウラジロガシのドングリと比べると帽子(殻斗)の模様が違う。

れており、頸城を含む本州中部地方の現存植生図も既に一九八五年に作成されている(図1)。これによると、平野の市街地以外の大部分は水田と水田雑草群落が占めており、その周囲の丘陵地はヤマツツジやオクジョウジザクラ等を伴うアカマツやコナラの雑木林かスギの植林となっており、山地を少し登れば標高五〇〇m位からミズナラが多く混じる林となって、標高一〇〇〇m近くからはブナ林が現れ、さらに妙高山塊の高所まで達すればダケカンバやミヤマナラ、オオシラビソなどからなる亜高山植生となることがわかる。この図の作成から二〇年以上が経過し、水田や丘陵の植生が宅地などの造成によって縮小してはいるものの、全体的な植生の配置は大きく変わってはいないと思われる。

前述した頸城の現存植生のうち、人間の影響を全く受けていないとは言えないまでも、それに近い自然の植生と考えられるのは、ブナ林と亜高山植生の部分のみであり、面積的には極めて限られている。その他は、水田やスギの植林は言うまでもないが、一見、自然に見える丘陵地のアカマツやコナラの雑木林も、燃料を集める薪炭林や、肥料や飼料等を集める農用林として人間が利用するために手を加え維持されてきた植生であり、山奥のミズナラ林もかつて木材を切り出した跡に二次的に形成されたと考えられるものが大部分である。このような人為の加わった植生を生態学においては人為植生または代償植生と呼んでいるが、代償という言葉には、人為が加わらなければ存在したと考えられる本来の自然植生に置き代わって存在している植生である



五智裏山から関田山脈方向
五智裏山からの関田山脈の遠望。手前に広がる丘陵地はコナラ林とスギ植林が覆っている。



市街地遠望
湯殿山あたりからの上越市街地の眺望。手前の斜面はコナラ等の優占する落葉樹林で，山麓にはスギ植林地が広がる。





上　柿崎遠望
米山からの柿崎市街地の眺望。手前の斜面にはブナ林が残るが，山麓の丘陵地はコナラ林とスギ植林，低地は水田となっている。
下　ブナ
霧に包まれたブナ林。ブナは頸城では海岸近くから生育するが，まとまった林はしばしば雲の中となるような山地の高所に限られている。

との意味合いが込められている。

頸城の「自然の植生」

それでは、本来の自然植生とはどのようなものであったのかというと、比較的最近に人為が加わって過去の記録のある場所の他は、わずかに散在する自然植生の痕跡と、緯度、標高、地形等を手がかりにして推測するしか手は無い。この推測の根拠は、一般に植生は気温、水湿、日照、基質（土壌）等の環境条件が大きく変化しなければ連続して分布するという経験則である。また、樹木には日当りの強い所で若木から早く生長する陽樹（マツ類、ナラ類等）と、若木がやや弱い光条件でゆっくりと生長し続ける陰樹（カシ類、ブナ等）とがあって、森林伐採後はやがて最初は陽樹の林となるが、光の弱い林内では陽樹よりも陰樹の若木の方が生長がいいため、最終的には陰樹の林に移り変わって安定することが、生態学において植生遷移の規則性として認められている。したがって、岩石地や砂丘のように貧栄養でなく、土壌の安定した場所では、その環境条件で生育できる陰樹林を本来の自然植生として推測できることになる。そして普通、ある地域の現存植生図を作成する時には、代償植生の部分に本来の自然植生を推測して示した潜在自然植生図と呼ばれるものを合わせて作成することが多く、前述の本州中部地方の現存植生図の場合にも、やはり対として作られ、その潜在自然植生図の中に頸城における本来の植生配置の推測結果が示されている（図2）。

(図2) 頸城の潜在自然植生図

宮脇昭(1985)の中部地方潜在自然植生図の一部を抜粋。以下の凡例は名称を改変して記載。

1：イノデ・タブノキ群落
11：ヒメアオキ・ウラジロガシ群落
16：トネリコ・ハンノキ群落
17：砂丘植生
22：池沼植生
23：ブナ林
29：チャボガヤ・ケヤキ群落
33：シロヤナギ群落
35：オオシラビソ林
36：ダケカンバ群落
41：コケモモーハイマツ群落



この図から頸城の潜在自然植生を概観すると、まず平野部は、ハンノキやトネリコ、ヤナギからなる湿生林が広がり、その周囲の丘陵地の縁部や山地の谷沿いには、本来はチャボガヤやヒメアオキ等が林床に生えるケヤキやアカイタヤの林となるのが自然な植生のはずであることを読み取れる。そして、海岸沿いを除く丘陵地から山地にかけては、現在よりもはるかに広くブナ林が覆い、海岸沿いの丘陵地では、常緑樹であるウラジロガシやヤブツバキ、アカガシ等の林が成立する可能性が高いことが推測されている。これらはあくまで現在の気候条件下での推測であるが、植物化石（花粉を含む）等の分析によれば、今から一五〇〇年ほど前の古墳時代までは現在と似たような気候であったと考えられ、まだ人間の影響が少なかったであろう当時の頸城にはこの潜在自然植生図に近い植生が見られたものと思ってもよいだろう。

稲作の伝播

頸城への稲作の伝播は弥生時代中期以降とされ（上越市史〈普及版〉）、平野部の水田化は、古代から中世にかけて少しずつ広がり、おそらく最初は谷内（やち：丘陵縁部の谷状地）や川沿い、池沼周囲の水の豊富な湿地から利用されていったことであろう。戦国時代末期から江戸時代になると、大規模な新田開発が行われるようになり、用水を開削して河川上流から水を供給することで水田が拡大し、江戸時代末期から明治時代には、丘陵縁部の各地に溜池が築かれて、水田への水の安定供



ハンノキ
ハンノキの生育状況。上越教育大学構内の湿地には、ハンノキが優占して生え，直立して立ち並ぶ樹幹が目立つ。



ウラジロガシ
ウラジロガシの果実（ドングリ）。その名の通り、葉の裏は白い。



トネリコ
トネリコの水中根。トネリコは水際に生育することも多く、水中に伸びた根はクネクネと曲がって広がる。

給が図られていった。その過程で、平野部に優占していたハンノキやトネリコの自然林は減少していったと思われるが、この両種は多湿な土壌に旺盛に生育できることから、水田の畔に植え、秋に刈り取った稲を干す「はさ木」として多く使われたため、かつては頸城の田園地帯にはハンノキやトネリコの人工的な疎林が広がっていたと言ってもいいかもしれない。現在、コンバインと乾燥設備の普及で不要となったはさ木は、稲の日当たりを悪くし、農道の障害物となる邪魔者として伐採されてほとんど見られなくなったが、両種からなる林は一部の谷内や川沿いの湿地に残存するほか、最近は放棄水田に芽生えて林を再生している状況も見られる。

人間生活の拡大と植生

人間生活の拡大に伴って、平野部では水田化によりハンノキやトネリコの林が減少したように、丘陵から山麓部では木材を切り出し、薪炭林や農用林が広がることによって、海岸近くのカシ林や丘陵縁部のケヤキ林、そして丘陵から山地まで広く覆っていたブナ林が減少していった。カシ類やケヤキの材は堅く丈夫で、縄文時代から農具や食器等の材料として重用されていたことが遺跡出土品から知られており、頸城でも同様に有効活用されたと思われ、現在は社寺林等の限られた場所にのみ巨木を見ることができる。ブナも古代から漆椀の素材等として利用されたことが他地域では確認されているが、材の均一な乾燥が難しく変色や腐れが入りやすいためか、カシ類



箕冠城跡
箕冠城跡からの頸城平野部水田地帯の眺望。集落は丘陵縁部や河川の自然堤防上に存在する。

やケヤキほど多用途には使われず、薪炭材として盛んに使われたようである。これらの陰樹は、前述の通り、伐採されると陽樹のコナラやアカマツの二次林に代わっていき、さらに薪炭林として利用される場合には林が再生されると伐採が繰り返されるため、陰樹林に戻ることなく維持されることになった。また、建築材としては、耐朽性が高いクリが縄文時代から広く使われていたとされるが、古代になると、スギの利用が高まり、丘陵地では植林がされるようになって、江戸時代からはアカマツの植林も盛んに行われたようである。このようにして人里近くの林は現在のいわゆる里山としての植生になっていった。

林業では里山に対して奥地林という言葉があるようだが、明治、大正時代までは、頸城の奥地林には未だブナが豊富に残っていたようである。前述の通り、ブナは材に利用し難い性質があり、奥地までは大量に伐採されることが無かったためであろうが、昭和初期、全国にブナの加工施設が造られてから、第二次世界大戦軍需用の合板生産もあり、奥山でも伐採が進行するようになった。また、戦後はパルプ材としての需要が高まり、林野庁の広葉樹林を伐採しスギやヒノキに植え替える「拡大造林」政策と合わさって、さらに伐採範囲が広がった。結局、ブナ林は林道の整備が遅れた奥山の高所に残るのみの状況となったが、次第に大きくなった自然林保護の世論により、平成に入って林野庁も政策を転換し、貴重なブナ自然林がかろうじて守られることとなったのである。

自然の構成者

本稿では、現在の頸城の植生の成り立ちを紹介することによって、頸城の「自然」の大部分が実は縄文時代から今に至る人間生活の影響を受けて形成されていることを確認することが狙いであった。そのため、紙面の都合上、頸城の植生の特徴やそれを構成する興味深い植物達については、紹介できていない。冒頭で、厳密な定義では、現代の地球上には自然の事物などほとんどないのではないかと述べたが、それは人間と自然を対置させる考え方であり、人間自身その活動も自然を構成する一部であるとの考え方にたてば、まだ身の回りには自然が沢山あり、同時に、これから未来の自然の構成者としての責任があることに気付けるのではないだろうか。

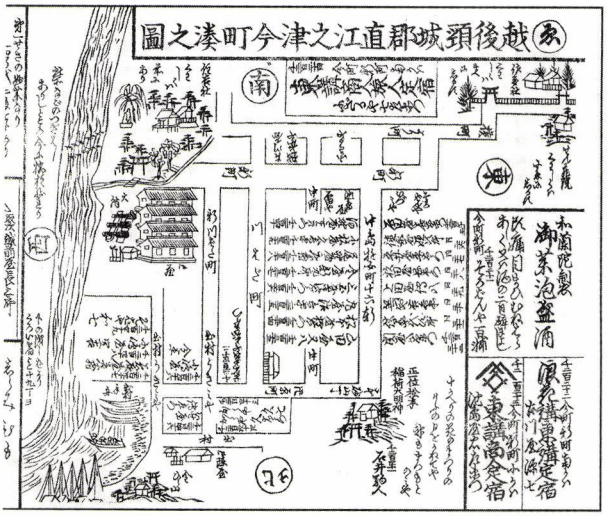
参考文献
「森を読む」大場秀章 一九九一 岩波書店
「上越の自然シリーズ3 大地」
上越科学技術教育研究会(編) 一九九五 上越市
「上越市史〈普及版〉」
上越市史編さん委員会(編) 一九九一 上越市
「上越市史資料編1 自然」
上越市史編さん委員会(編) 二〇〇二 上越市
「上越市史 通史編1 自然・原始・古代」
上越市史編さん委員会(編) 二〇〇四 上越市
「日本人と木の文化」鈴木三男 二〇〇二 八坂書房
「ブナ林の自然誌」
千葉県立中央博物館(編) 一九九二 千葉県立中央博物館
「木の大百科」平井信二 一九九六 朝倉書店
「日本植生誌 中部」宮脇昭(編) 一九八五 至文堂

略歴
一九六五年 新潟市生まれ／新潟大学大学院理学研究科修士課程修了／新潟県立長岡高等学校教諭／東北大学大学院理学研究科博士課程修了／二〇〇七年 上越教育大学大学院学校教育研究科学習臨床講座准教授
専門・植物分類学、教育領域・生物教育、自然環境学習
著書・「ヒマラヤに花を追う―秘境ムスタンの植物―」八坂書房
Flora of Mustang, Nepa 1 講談社サイエンスなど

投稿

芭蕉と関川の渡し舟

佐藤とみじ



「東講商人鑑」に見える下の渡し

町内の郷土史家のM先生から拝借した大星哲夫『越後路の芭蕉』は、芭蕉の県内の足取りを、著者自身が実地に検証した労作で類書を近づけない内容であるが、M先生は「黒井から直江津へ芭蕉は何処を通ったのか」と問題提起される。

芭蕉が山形の鼠ヶ関から越後路へ入ったのは旧暦六月二十七日で市振までの三二〇キロを十六日間かけて踏破し、この間村上・直江津に二泊、高田に三泊している。芭蕉四十六歳・曾良四十一歳と壮年期の旅であったが、越後路の記述は「暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」とそっけなく、問題の黒井一直江津間も、曾良の旅日記に「六日雨晴。鉢崎ヲ昼時、黒井ヨリスクニ浜ヲ通テ今町へ渡ス」と簡記されているにすぎない。

一六一四年松平忠輝が高田築城の折、高田城下の独占的繁栄を図る為、直江津の「応化の橋」を取壊し、人と物を稲田橋へ迂回させて高田の街へ誘導した。

それから十二年ほど経た松平光長時代（一六二四年）に、「渡し守」への給米の保証など「渡し」の制度的整備がすすんだと市史には記されている。従って、元禄二年、芭蕉が来越した稲葉正通時代は、忠輝より七十五年も後世であり、制度として「渡し」が完備していたのは自明で、残る疑問は何処の「渡し」を通ったかという一点である。



往下橋（東本町三）

取壊された「応化の橋」は現在、東本町三丁目の青田川に架かる「往下橋」にその名を留めており、この間の橋の消長は「広報たかだ」一三二号（昭和三七年八月一日）の池田嘉一氏「往下橋」に詳しい。

ここで、教育委員会生涯学習推進課（懇切丁寧にご教授願えるから有難い存在だ）に早速「川舟と渡し」の照会をしたら折り返し次のファックスが入った。



（回答）

渡し舟に関する文献についてですが、上越市史「通史編4近世」の以下のページです。

・四四六頁～四五〇頁。また、六一六頁から松尾芭蕉と曾良の足取りについて記述されています。労災病院付近にあったという「応化の渡し」は、名称が上記市史では出てきません。どの文献の記述であったか定かでないようですので、確認できましたらご連絡させていただきます。（以上）

また、同課より参照資料として上越市史叢書「考古・中近世資料や福島城及び城下町の復元要図などのコピーも頂いた。

市史「通史編4近世」を開くと概略次のことが記述されていた。

①直江津の渡り舟は「上」と「下」の二か所にあった。

鉄橋付近。

「下」は出村一黒井へのルート。現在の琴平神社付近。昔は出村と称した。

③いずれも六艘の渡し舟があり、芭蕉の頃の渡舟賃は旅人との相対で決定。

素人判断だが、芭蕉が通った「渡し」は、曾良旅日記の「黒井ヨリスクニ浜ヲ通テ今町へ渡ス」の文脈に、最も矛盾がない「下の渡し」ではなかったろうか。

現在、関川の河口の中央三丁目・琴平神社境内に芭蕉の句碑が再建されている。

文月や六日も常の夜には似ず

「渡し舟」で直江津に入った当夜、古川市左衛門宅での作とされている。

句碑は、幾度も大火で焼けたが慶応年間に再建された。凹凸のある自然石に彫られ文字は摩滅して判読しにくいが、一四〇年の風雪に耐えた歳月の重さが心を揺さぶる。隣には、珍しい「百度石」が並んで立つ。浜風に打たれ裸足でお百度を踏む老女のイメージが重なり、冬鴎の舞う荒涼とした関川の河口に佐渡航路の汽笛が寒い。消えゆくものへの哀惜の念が切々と胸に満ちてくる。（春日野在住）



文月や六日も
常の夜には似ず



お百度石



思い出の黒井村

（下）

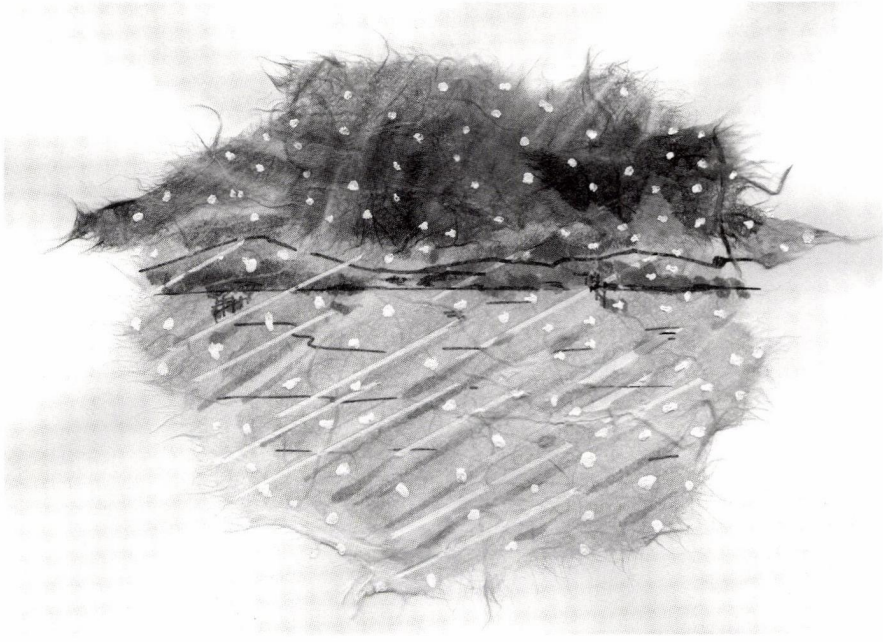
文　松本恵子
絵　丸山えみ子

写真は若き日の松本恵子
『松本恵子探偵小説選』（論創社刊より）

やがて北国の冬がやって来る。毎年のように十一月三日の天長節というと初雪が降り、それからは毎日のように北風がヒュウ!!　ヒュウ!!　唸り、霰をばらばら窓に叩きつけ、静かな夜はぼたん雪が音もなく降り積もり、海からは夜も昼も地底から湧いてくるような潮鳴りが響いて来る。

私は殆ど日の目を見ない灰色の毎日には、さすがにうんざりして、時折裏口から田圃の遥か彼方に城壁のように連なっている白い山脈の後が幽かに茜色に染まっているのを眺めて、あの山のむこうには東京がある。東京には太陽が輝いているのだと思って、溜息をつくのであった。

私は小学三年から四年までは八千浦村尋常小学校で南條宇太郎先生の教育を受けていた。学校では一年生と二年生とが階下の教室、三年生と四年生は二階の教室で、その後の方には赤ん坊を背負った子守の一団が立って教授を受けていた。南條先生は一年生に算数の題を出しておいて、二年生に書取りをさせ、三年生に習字をさせ、四年生に歴史の講義というふうに、一人で四学級を教えていらした。子守の背中で赤ん坊が泣き出すと、「腹が空ってるんだろう。家へ飛んでって乳飲ませて来い！」とか、



「ションベンしたんだろう、おっかさんのとこへ連れて行って、ぼろは取りかえてもらって来い！」

という具合に、教授から子守の世話まで一手に引き受けていらした。そればかりでない。放課後に生徒が学校で遊んでいると、

「おい、お前ら早く家へ帰って親の手助けしろ」

とどなって一人残らず追い帰してしまわれた。私は東京の学校では、放課後に運動場で遊んでいても校長先生に叱られた覚えがなかったので、南條先生はどうしてこんなにやかましいのかと不思議に思っていたが、或る日教室に忘れて来た童話の本を取りに行ってその謎が解けた。

南條先生は、いかめしい顎ひげに似合わない恰好で教室の掃除をしていらした。継ぎの当たったズボンを膝の上までまき上げて素足で雑巾がけをしていらっしゃるのを見て私はびっくりして、

「先生、お手伝いしましょうか」

と、声をかけた。先生はちょっと驚いたように後をふり返って

「ああ、お前は親の手助けせんでもいいんだな。それじゃあ、その机を元通りに並べてくれ」

とおっしゃった。

その後私は時々、放課後の掃除を手伝った。南條先生は冬になると、朝早く学校へ来て、火鉢に山のように火を起して、生徒がかじかんだ手を温めるように用意していらした。

最初私は、あばた面にもじゃもじゃした顎髭を蓄え、継ぎはぎだらけの服を着た先生と、床の節穴を覗くと、下の教室が見えるような傾きかかった校舎にがっかりして、

「あんなおんぼろ学校へ行くのいやだわ、へんてこな先生が一人しかいない学校なんて！」

と不平をこぼしたが、父に、

「学校は建物が立派ならいい学校とはいえない。先生は風采がよければ必ず立派な先生とはいえない。南條先生はえらい先生なのだよ」

とたしなめられた。そして私は歴史の時間に南條先生が楠正成の忠義を涙を流して語られるのを、子供心にも感激して聴き、南條先生は偉い方だと思った。

私は、南條先生の奥さんが鰯漁が始まると毎日のように浜から鰯を二つの籠に一杯にしたのを天秤棒で荷なっていらっしゃる姿を見かけた。それは山村の家を巡廻して注文を取っておいて、鰯の塩辛を作って、それを樽詰にして注文先へ届けて、生計を立てていらしたのだと後日知った。それに長男の芳夫さんは高等小学校へも進まないで何処かへ奉公に行ってしまい、みさおさんも遠いところへ子守にやられてしまったと聞いて、どうして校長先生は家族の人たちを、そんな扱いをするのか不思議でならなかったが、南條先生は村役場で誰か公金を使い込みした者があったために月給を一銭も貰わずに村の子供の教育に打ち込んでいらしたのだという事を、私は大人になってから知った。つまり南條先生御一家はみんな村の子供達の教育のために、大きな犠牲を払っていられたのであった。おそらくその事実を私の父が誰かに聞いていたのであろう。それで前述のような言葉を私に与えたものと思われる。

それから二十年経たある日、私は南條先生の三男の忠四郎さんの訪問を受けた。その方は独学で教員の資格を取って、その当時、東京の戸塚小学校の訓導になっておられ、「中野区の桃園小学校から栄転した時にＰＴＡから盛大な送別会をされ、立派な記念品を贈られたのに引きかえ、父は生涯をかけて勤務したのに、立派な校舎が建つと共に退職して、粗末な火鉢を一個貰ったきりだった事を思いあわせて、父のために涙をこぼした」と語り、「父は一生を教育に捧げたのに、何故私たち子供が学問をすることを極度に嫌ったのでしょう。私なんか勉強しているのを見付けられては父に怒鳴りつけられたので、まるで悪事でも働くように隠れてこそこそ勉強しました。父は何故あんな

だったんでしょう」と述回されたので、私は、

「南條先生は村の子供たちの教育に打ち込んだ生涯が、誰にも想像の出来ない程苦難の道だったので、人の親として絶対に吾が子にその苦労を味わせたくなくていらしたのでしょう」

といって、私は自分の眼に映じた先生に就いてお話したのであった。

その時、若い南條先生は兄上の忘れ形見のお嬢さんを同伴しておいでになり、将来は教員の資格を得させるために、引き取って勉強させておいでになるとの事であった。その時、私は迂闊にも御住所を伺って置かなかったので、夕方帰宅した松本（恵子の夫）に戸塚小学校へ先生を訪ねて、そのお嬢さんの学費を幾分でも援助させて頂くよう、ご相談して来るように言われたが、私が病気したり、松本が入院したりして、遂にそれを果さないでしまい申訳ない事をしたと思っている。

さて黒井村の小学校は四年生までで、それから先は直江津の高等小学校へ通う事になった。現代の小学校の五年と六年を当時は高等科の一年、二年といっていた。

冬から春の雪融けまでの期間の通学はなかなか大変だった。何しろ村を出て直江津の町へ入るまでの道筋は、一方が日本海の怒涛がまるで大砲を射ち込むような轟音を立てて砕ける浜辺で、一方はその昔、堀、松平両氏の城であったが、海の音に不眠症に罹った奥方のために城を高田に移したとかで、広い草原になっていて、夏になると牛が放牧されているだけで、人家など一軒もなく北風が吹き荒れているのであった。温暖な季節でもその辺を強風の日に通る時には、砂を叩きつけられるので露出した脛が、まるで千本も一万本もの針をさされるように痛くて、真赤になるのであった。とにかく、そんな場所を通らなければならないので、家では吹雪の日には学校を休めという。だが子供仲間では、悪天候ぐらいで学校を休むなんて恥ずかしい事になっていた。

それで、私はそんな悪天候の日は特別に早起きをした。まだ暗いのにもう近所の家から藁を打つ音が低く響き、石臼で粉をひく海鳴りのような音が床に伝わって来るし、どこかで鶏が時をつくり、台所では粗朶を燃やす音がパチパチいっている。私は寝床の中で眼を覚ますときき耳を立てて、戸外が吹雪で荒れてるのを知ると、飛び起きて大急ぎで着がえをし、冷たい水で顔を洗い、炉端で味噌汁と炊きたての米飯で朝食をすませる。私が味噌汁のほかに、まだ豆が煮えていなかったりするのに文句をいうと、ばあやは、

「村の衆はこんな白い米の飯に、味噌汁なんか朝っぱらから喰う者はないんだでね。みんな虫の喰った米を石臼でごろごろひいた黒い粉で作った焼きもちと、しょっぱい塩辛ちっとばかしで朝飯なんだすけね」

といって私をたしなめた。

最も夕飯を五時に食べて、七時に寝床に追い込まれるとすぐに熟睡してしまう健康な子供は、朝眼の覚める頃には、ひどく空腹になっているからこの早朝の食事は山海の珍味のようにおいしかった。そんな朝遠くから犬の吠えるような声が聞えてくる。



「ほれ、狐がクワイ！　クワイ！　とないている！　冬は狐も食い物がなくて腹を空かせて里へ出て来るんだわね」

と、ばあやが説明した。私は空腹に痩せた狐が餌を求めて凍てついた田圃を空しくうろついている姿を眼に浮かべて可哀想に思い、温かいご飯を食べている自分は幸福だと思った。

さて父母や妹たちがまだ寝ているうちに家を抜け出すと、往来にはもう直江津行きの生徒が列を作って、全員が揃うのを待っている。誰が決めたともなく、こうして互いに待ち合わせ大きい順に並ぶのであった。そのころ子供たちは、カクマキと称んでいた四角な大きい赤毛布の下部を腰に巻いて紐できちんと括り、上部を頭からかぶり、ちょうど達磨さんのような恰好をしてその上から綿の入った紺がすりや縞の帽子を被っていた。小さい私はその列の尻尾について、前の子のカクマキの背にしっかりとつかまり、大きい男の子の先導で、まるでむかでのように吹雪を衝いて行進するのであった。帰りも又皆で待ち合わせて村へ帰って来るから、決して家で心配するような危険はなかった。

それに子供同士の間では、学校や家庭で習わない、さまざまな知識をわかち合った。たとえば路傍に生えている雑草の中で食べてもいいものや、毒草の見分け方や、キンポーゲの実やウツギの実は見た目にはきれいだが、食べると死ぬ事だの、銀杏や胡桃の実は手が腐るから、地面に穴を掘って板や板っこばで寄せ集め、穴に埋めて土をかけて置き、外皮が腐ってから掘り出して水洗いして、乾かした上で分配する事などを私は黒井村時代に仲間から教えてもらった。また雪の中を歩いて手足が冷えてしびれる程痛くなって来たら、そのまますぐ火にあたると腐ってしまうから、先ず雪でごしごしこすって手足がほかほかしてから火にあたることなども仲間から授かった知恵であった。

ところで長い冬がようやく過ぎて春の太陽が近づいてくると、今まで屋根や軒に凍りついていた雪が融け始め、終日その融け水がタラン！　タラン！　タラタラタラ！　とまるで村祭の太鼓のような陽気な音をたて始める。その音が待ちに待った春のおとずれを告げる嬉しいファンファーレだ。ところがそれが直江津に通学する私たちにとって、吹雪よりもっと厄介な障害との戦いが始まる予告であった。というのは、小川の橋を渡った先の赤土道路は雪融けと共に、あちこちに泥濘（ぬかるみ）が出来て、そこへ差しかかると一歩ごとに履物が吸い付くか小さな足が全然埋まって動きが取れなくなってしまう。そこで下駄を取られると、泣きべそをかいてどろんこの裸足で学校へ行かなければならない。そうした憂目に遭って途方にくれている小さい連れを救ってくれたのは、冬中通学を共にした一団の年長の男の子であった。

ある日彼は、一枚の長い板の先端に穴をあけてそれに縄を括りつけたのを引きずって来て、泥沼にそれを渡して一同を無事に難所を通過させ、町の入口までいくとその移動橋を材木置き場にかくして置き、帰りにはまたそれを取り出して、私たちの足を救ってくれるのであった。それだのに私たち女の子は、男の子たちと一言も言葉を交わした事はなかったし、お互いに名も知らなかった。尤も高等小学校になると男子部と女子部は、別々の校舎だったから無理もない事であったが、私たちは移動橋を渡ると黙っておじぎするだけで朝夕会っても、「おはよう」とも「さようなら」とも言ったことがなかった。私は今でもあの通学の時の事をはっきり覚えている。あの大きな男の子は一体何処の誰だったのかしら？

もう一つ忘れられない事がある。ある夕方私は学校の掃除当番で遅くなって、ひとりぼっちで寂しい海岸の道を、強い西風を背に受けて、面白いように速力を出して走っていると、大きい男の子が

「ばか！　危ないぞ！」

と叫んで風に吹きとばされて走っている私の肩をおさえて、

「いいか、西風の時には、橋をめがけていくと、川の中へふっとばされてしまったんだぞ！　ここまで来たら橋の右方の川をめがけてとんで行くとええあんばえに、橋の真中へ行くんだすけ！　覚えておけよ」

と教えてくれた。

あれは何処の何という名の子だったかしら？

雪融け時が過ぎるころ家ではばあやがよく裏へ出て、額に手をかざして遠くの山を眺めていた。妙高も黒姫も、その他南の空に連なっている山脈はまだ真白であった。しかし南葉山は紫の山肌を見せ始めていた。ばあやはある日、傍に立っている私を振り返って

「ほらね、あばちゃん、見なせえ、南葉山に種蒔男が出たすけ！」

といって指さした。

そういわれてよく見ると白い山肌に黒く大きな男が片手に箕をかかえ、片手を高くあげて種を蒔いている姿が現れていた。雪が融けるにつれて、そんな風に見えるのだが、村人たちは、南葉山に種蒔男が現れれば最早おそ霜のくる心配はないとしているのであった。

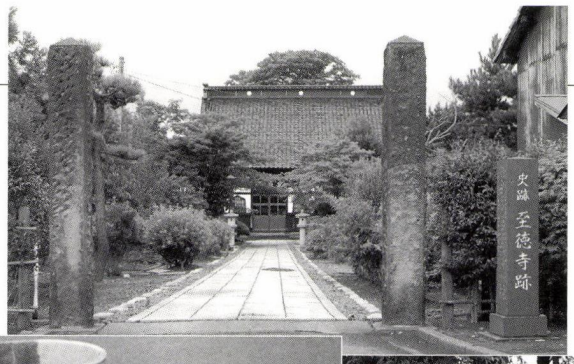
長い年月が黒井村をすっかり近代的な立派な町に変えてしまったと聞いているが、私にとってはあの頃の凸凹の道幅の狭い、屋根の低い家並の黒井村には、幼い日の楽しい夢が沢山刻みつけられていて、忘れがたいものになっている。



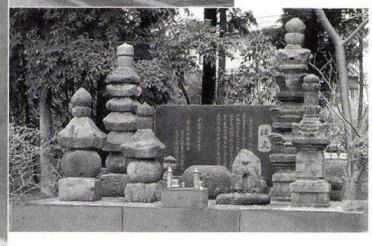
文学の旅

「梅花無尽蔵」　万里集九
「北国紀行」　堯恵
「廻国雑記」　聖護院道興

中世の文化人
「越後府中」を訪ねる三人の旅人







至徳寺の面影を伝える徳泉寺（直江津駅南）には、出土した当時の石塔が集められて供養されている。
直江津駅南の開発による「伝至徳寺跡」の発掘で、守護所と推定される遺構が見つかり、守護大名上杉氏の饗宴の品々が出土した。

応仁の乱で京都を逃れていた相国寺の詩僧万里集九（ばんりしゅうきゅう）は、文明十七年（一四八五）、太田道灌の招きで江戸城に赴き、道灌が自ら「梅花無尽蔵」（これが詩文集のタイトルになる）と名づけた屋敷に住み、その庇護を受けていた。しかし、翌年七月二十六日、相模国糟屋（神奈川県伊勢原市）の上杉定正の館で太田道灌が主君定正の手によって殺害されてしまった。

そのころ越後府中を訪ねる人がいた。「古今集」の読み方や解釈を秘伝として授ける「古今伝授」という技能を持った歌人堯恵（ぎょうえ）である。堯恵の「北国紀行」によれば、郡上八幡を五月末に発ち、六月十三日、越後府中の海岸に着く。京都で親交のあった正方法師を尋ねて数日過ごし、近くの居多神社を参詣して宮司の花ヶ前氏とも対面、

天の原雲の外まで八嶋守る
　神や涼しき奥つ潮風

と詠んでいる。そうこうするうち、越後守護上杉房定の聞こえるところとなり、守護のゲストハウスである至徳寺の最勝院に招かれた。そこは昨日までのような波音も聞こえず「樹陰の涼風袖に余る程」の快適な宿所であった。

七夕の宵は、

手向けせん幾万代か越の海
　今日梶の葉の歌の浜風

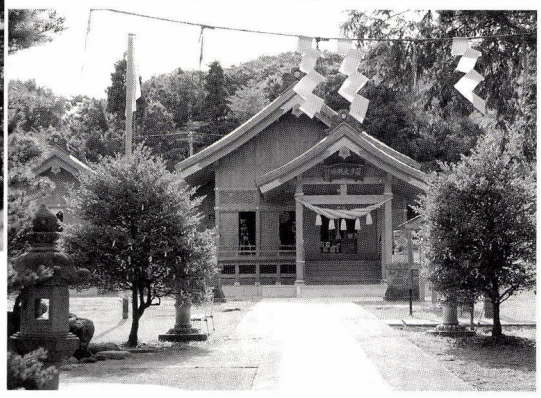
と詠み、十四、十五日には善光寺へ参詣している。

堯恵の滞在中の七月十一日、聖護院門跡道興は、北陸に修験道の旅を続けて「越後国府」に入り、上杉房定の案内で至徳寺長松院の貞



集九も見た能生白山神社大祭
春の一日をかけて舞が奉納される

越後一の宮　居多神社



操軒を宿にして七日間滞在している。

その間、「毎日色をかへたる遊覧」を楽しんでいるが、堯恵と対面していないのだろうか、二人の日記には何も書かれてはいない。旅立ちの日、

千とせへんしるしみせて
　此の宿の軒端に高き松の村立
日がずへてなれぬる旅の中やども
　なごりは尽じ都ならねど

と、「廻国雑記」に二首を残して三国峠を越え、上野国（群馬県）渋川の大蔵坊という山伏の宿坊に向かった。

道興は、道灌暗殺事件を大蔵坊で聞いたのだろうか。堯恵は今だ越後府中におり、房定の権力からすれば、あっという間に情報が伝わって堯恵も聞いたはずだが、八月の末、両上杉氏が相争い不穏な空気が漂う関東へと向かっている。（堯恵の日記は関東を周遊して再び越後府中を目指すところで終わる）

一方、万里集九は道灌殺害後も江戸城に留まっていたので、堯恵や道興の噂も聞いていたことであろう。その集九は長享（一四八八）八月江戸城を去り、途中で関東管領上杉顕定（あきさだ）に出会い、顕定の保護の下に越後府中へと向かうこととなった。

妻有、柏崎、柿崎を経て十月十一日、黒井を過ぎ、「西岸に柱を挿し、大綱を張り、渡る者は、皆、手を轉じて舟を遣る。号して轉舟（くりぶね）」という、綱をたぐって渡る舟で川を渡り、府中に到着した。府中のまちに入る道中は、砂に馬の足がとられ遅々として進まず、塩焼きの小屋が軒を連ね、煙はまるで垣根のようだと書いている。まちに入っ途端に雨が降り出し、ずぶ濡れになりながら宿を探すことになってしまった。そして、従者の「桂を薪に炊く」ような物価高の報告も受けている。

十三日、ようやく上杉定房と対面が叶った。それからは連日の歌会、絵画への賛、詩の所望、庵の号を求められるなど、文化交流の日々が始まる。また旧知の僧との再会もあった。国分寺では伝説の琵琶を見、五智如来の詩を詠み、山本円通寺、居多神社、安国寺、吉川の雲門寺にも詣で、「梅花無尽蔵」に賞賛の詩を残している。

十一月十六日府中を後にし、藤崎の漁師の家に泊まり、桃花粥（小豆粥）を振舞われ、翌十八日には能生に着いている。宿では風呂に入り、「諸蕷麺子（しょよのめんす）」を振舞われた。諸蕷とはヤマノイモのことであり、麺子とは、うどん・そうめんのことである。府中で初めて食したが、都でもこんな風味には及ばないと言っている。二十五日からは太平寺（白山神社）に移り、半年間滞在することになった。

白山神社の祭礼の準備を見たり、近所の老婆と酒を飲み、炭の品質の良さなど、当時の庶民の生活ぶりを垣間見ることが出来る詩を多く残している。

集九は、翌年四月二十九日、振出しの美濃国へと旅立っていった。



三人が見た郷津湾の景色
（海上から）
テレビ塔のある薬師山の下の円錐形の山は中世の国分寺と推定される岩殿山

この夏 カメラの眼

直江津港フェスティバル

港ににぎわいを

上越の海の玄関口「直江津港」をもっと知ってもらい、港に賑わいをと、官民一体の「直江津港フェスティバル2008実行委員会」によって、直江津港フェスティバルが8月23・24日行われた。あいにくの雨だったが、循環バスの運行もあって、朝早くから大勢の人たちが訪れた。

海の貴婦人
日本丸
7年ぶりの来港

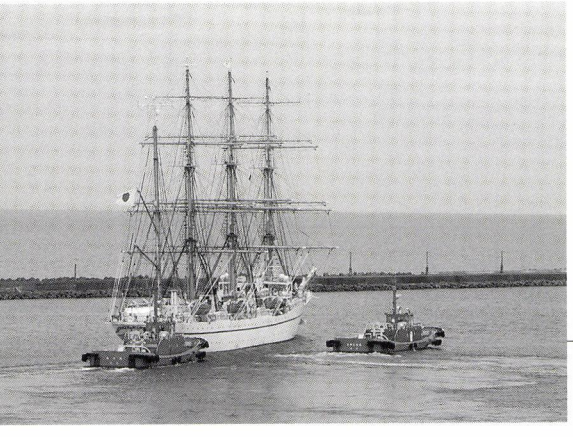




雨のなかで長蛇の列



熱心に観察？　ターミナル展望室で



“ごきげんよー”
登しょう礼の後、無事出航



ひさびさのジェットフォイル



たらい舟体験







天地人グッズも







浜汁、浜焼きで磯の香満載



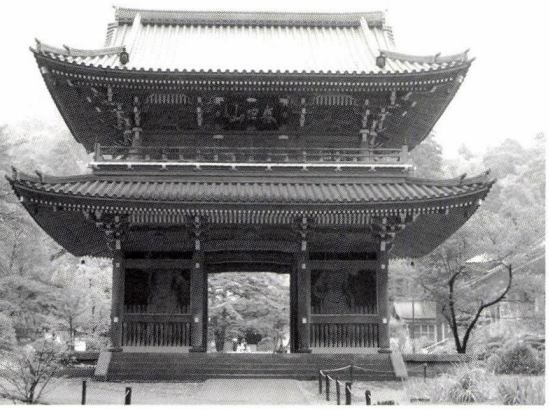
ハワイ大会優勝のフラダンス

この人に学べ



生涯謙信公を掘り続けた孤高の人

彫刻家 滝川美堂



美堂作仁王像を納める林泉寺山門

直江津の祇園祭で巡行する十九町の屋台のうち、本町・横町の屋台は巨大な木目込みの猿田彦神像を乗せている。五智に住んだ彫刻家、滝川美堂の作である。

滝川美堂、本名寅吉は明治十三年能生町に生まれた。生家は田畑や山林を持つ旧家であった。小学校では成績も良く、特に絵画が得意であった。二男として生まれた寅吉は、尋常小学校を卒業すると、父善四郎に従って農業に従事することになった。

しかし、好きな絵画の道への気持ちが日ごとに増し、十八歳のとき、反対を押し切って上京してしまった。上京したものの、師と決めている画家がいるわけでもなく、またその日の糧を得る当てもなかった。しかたなく酒屋の小僧などを転々としながら、弟子にしてくれそうな師匠を探すことになったが、そう簡単には見つかるはずも無く、無為の日々をすごすうち、ようやく一人の画家に会うことが出来た。画家は、昨日まで鍬を握っていたような寅吉の節くれだった手を見て、彫刻家になることを勧めてくれた。

寅吉はようやく斉藤美洲の弟子になることが出来、修業に励んだが二年目の夏、脚気に罹ってやむなく帰郷することになった。

ようやく快方に向うと、再び上京して彫刻の修業をしたいと



謙信公像
（林泉寺蔵）

いう気持ちが湧き上がってきたが、父は頑として許さなかった。しかし、「彫刻家として立つことが出来たなら、上杉謙信公の像を刻み林泉寺に奉納する」と願をかけて、氏神に参拝する寅吉の姿を見て、父も折れ、晴れて彫刻家の道を目指すことが叶った。

再度上京した寅吉は、朝日明堂の下で修業に励むことになった。寅吉の号「美堂」は両師匠の美と堂を受けて名乗ったものである。

なお、美洲も明堂も根付彫刻家として多くの作品を残している。

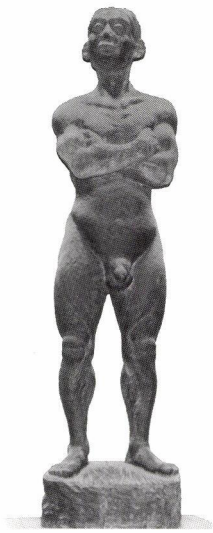
明治三十九年、彫刻競技展に「初雪」と題する象牙彫刻を出品し、みごと皇后陛下のお買い上げの栄誉を得るまでに至った。

四十一年、修行を終えた二十八歳の美堂は帰郷すると、能生鬼舞（きぶ）の名家、伊藤家に招かれて彫刻に励み、一年を過ぎたころ、当主助右衛門の勧めと旅費を得て京都・奈良の寺社に詣で、多くの仏像を見る旅に出た。助右衛門は、無名の陶芸家富本憲吉の作品を買い上げて援助するなど、芸術に深い造詣があった人である。

美堂は京都の下賀茂の社家で木目込み人形の技術を習得し、滞在中、京都の人形店の依頼で皇太子妃殿下（大正天皇の皇后）へ納める人形を作るまでになった。この技術が屋台の猿田彦につながっていくのである。

このまま京都にいれば彫刻師として生きて行くことが出来るのだが、美堂には、林泉寺に謙信公の像を納めるという宿願があった。

四十四年に帰郷して高田寺町に住み、白浜トヨと結婚し、新たな人生を踏み出すことになった。



故郷での最初の仕事が、高田中学の謙信文庫から依頼を受けた謙信公の像である。美堂はこれ以降、生涯に八三五体の謙信公を彫ることになる。

大正三年五智に移って、本格的に奉納する謙信公の製作に取り組むことになったが、資金のめどが立たずにいた。これを知った町の有志が「上越彫刻会」という、美堂の作品の頒布会を組織し、その資金によって製作に取りかかることが出来た。

大正十三年五月ようやく完成、直江津の新町で披露し、謙信公の乗った台車は、大勢の人たちによって紅白の綱に引かれて林泉寺に入った。

この日から、美堂は謙信像の第一人者と呼ばれるようになった。像は春日山神社、米沢の上杉神社にも納められた。米沢には上杉鷹山の像も納めている。

美堂の生涯の大作は、林泉寺山門の仁王像である。大正十五年に再建された山門には仁王像が無かった。それを惜しんだ人たちが「仁王像建立同志会」を結成、美堂に製作を依頼したのである。

彫刻家を目指していた美一を一時、呼び戻し、昭和四年から五年の歳月をかけ、台座を含め四メートルにもおよぶ阿吽の像が昭和九年四月、開眼の日を迎えた。

一生をかけ、謙信公像を刻み続けた美堂は、目標の千体にあと一六五体のところで、昭和三十五年、八十歳の生涯を終えた。





上　沖仲仕の頭（高達回漕店）
右　新町・町の屋台
下　美堂考案の土人形（親鸞聖人）

謙信公像の撮影にあたって、林泉寺様のご高配をいただきました。

参考「新潟県人物百年史」

■読書びと



忘却の河

福永武彦著

現在は新潮文庫
五四〇円（税込）

我が倉橋由美子は幽明界を異にする際『偏愛文学館』（講談社）なる書評集を遺した。古今東西を渉猟して身辺に置くに足りる、と彼女が撰んだ三十九冊、そこで狷介な倉橋に、「海市とは蜃気楼のことです。これをタイトルにしたこの長編小説（著者によればロマン）は、いくらでもあるようで実はめったにない本物の恋愛小説で、恋愛小説といえばまずこの『海市』が頭に浮かびます。」とまで称えられるのは、いまでは殆ど忘れられた作家福永武彦の作品である。

彼が六八年に新潮社より上梓した長編『海市』は、モーツァルトのクラリネット五重奏の耽美な音色を纏ながら、四十歳の画家である「私」と、安見子という名を持つ美しい女性が紡ぐ愛と死とエロスの物語。その舞台、蜃気楼の見えるという左浦海岸から落人部落の描写に惹かれ、その頃細君と南伊豆の村々を歩いたことがある。子浦・落居・伊浜……、海辺の丘を越えていく径を辿り、福永が第一詩集『ある青春』で形見に刻んだ風景とも出会った。

福永武彦は一九三二年、福岡県に生まれる。一高在学中から詩をつくり東京大学仏文科を卒業、戦時下には押韻定型詩の同人『マチネ・ポエティク』を結成した。敗戦後は中村真一郎、加藤周一の三人と共著で戦闘的なマニフェスト『1946年・文学的考察』を世に問い、次いで戦時中から書き接いだ小説『風土』や佳品『草の花』により地歩を固める。学習院大学で教鞭をとる傍ら、『ボードレールの世界』、『ゴーギャンの世界』他の評論、共に映画化された『廃市』や『風のかたみ』などの夢幻感あふれる物語、前衛的な『夜の三部作』やシベリウスの曲想の上に聯関する『死の島』等々、知的抒情によって織り成された作品世界を展開した。玩草亭を号した孤高の文士は、生涯を病と同伴して一九七九年八月十三日、六十一歳でこの世を去った。

福永の著作が書肆の店頭に無く図書館の開架にも見当らない、と嘆じていたところ『忘却の河』が昨年夏に新潮文庫から復刊された。

初版が一九六四年のこの長編小説は、各章が「独立した作品であるかのような印象を与えたいという意図」のもと一年間にわたり、一章と終章の二篇が雑誌『文芸』に、二章から六章までの五篇は全て別々の雑誌に、単独発表される。

エピグラフに掲げられたギリシャ神話辞典の字句。「レーテー。〈忘却〉の意。エリスの娘。タナトス（死）とヒユプノス（眠り）の姉妹。また、冥府の河の名前で、死者はこの水を飲んで現世の記憶を忘れるという―。」

藤代という五十歳を過ぎた男（戦後営々として中規模の会社を興した経営者、という福永では異色の造形）とその家族の四人の内面を交差させ昭和三十年代の時代を背景に、孤独な魂を抱えて生きる人の忘却と記憶の意味を見事に定着させた。恋人を裏切って死に追いやった過去を持つ藤代は、まさに海市の「私」と重なり、愛の試みと救いを希求する彼らの原像といえる。

『夢の通い路』の章は、病で床を離れられぬ藤代の妻が、戦時中互いに惹かれ合った学生が散ったソロモン沖の海原を生涯思い続ける情景を、地の文に織り込まれた十首余の式子内親王の和歌に込めた独白で綴られる。はかなしや枕さだめぬうたたねにほのかにまよう夢の通い路。終章『賽の河原』で妣の国を魂の在りかに各人の想いが結ばれるまで、緩み無い連作集である。

岡鹿之助の装幀からモダンに衣替えした文庫版は、福永の忘れ形見、池澤夏樹の「今、『忘却の河』を読む」という解説エッセイで飾られた。「息子であるぼくがこういう文を自分の本に添えたと知ったら父がどんな顔をするか、見てみたいと思うけれども、それはこの世でかなうことではない。」玩草亭先生、以て瞑すべし。（侵）

■上越なおえつ信金倶楽部講演会　平成 20 年 8 月 20 日

戦国武将に学ぶ近代経営

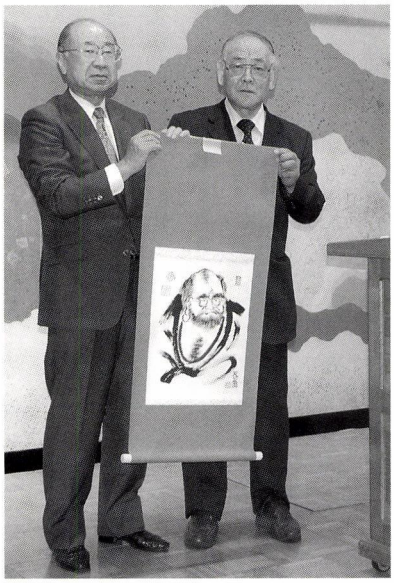
講師・全建経営指導センター・経営コンサルタント・経営学博士
天本 武 氏

講師の天本武氏は、三十年余り中小建設・専門工事業の経営コンサルタントとして活躍するかたわら、建設業の近代化・合理化をテーマとして全国の建設業者と接触し建設経営の研究を重ねている。特に中小建設業の人材育成には多くの実績を上げている。

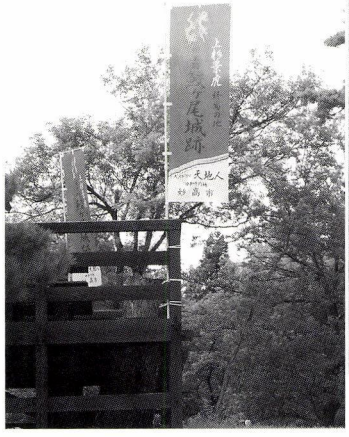
今回のテーマは、戦国武将上杉謙信から学ぶ戦略・戦術、人心掌握術。

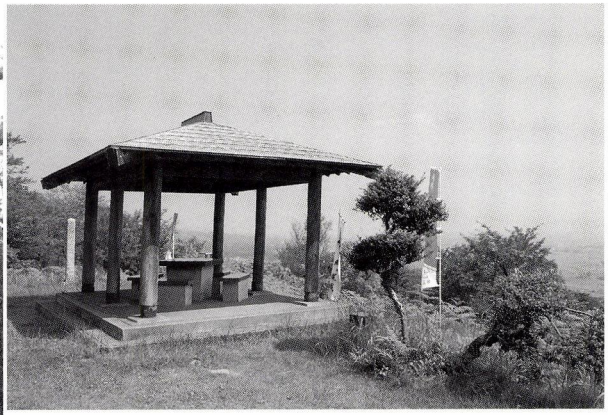
第四回川中島合戦で妻女山に陣を敷いた上杉軍が武田軍の動きを察知して、密かに八幡原へ陣を移動させた謙信の洞察力と、今何をすべきかという果敢な行動力を高く評価し、部下への信頼、経営者のあるべき姿として、管理者の最終責任の取り方を見、日ごろは一汁一菜の質素な食事を出陣に当っては、すべての将兵に食べきれないほどの山海の珍味の食事を振舞う「お立ち飯」の古事から、人心の掌握術を学ぶべきだと指摘した。

天本氏は天本法眼天翠という号で達磨大師の絵を良くし、講演後、記念に達磨大師の軸をご寄贈いただいた。



達磨大師の軸を手に天本氏と中川会長





鮫ヶ尾城跡

妙高市の鮫ヶ尾城は、御館の乱で敗れた上杉三郎景虎の終焉の地。米蔵跡からは今も焼けた米が出土する。三の丸からは黒焦げになった握り飯も発見された。悲劇の後は今も生々しい。幟も「天地人」よりも「上杉景虎終焉の地」という文字の方が大きい。斐太神社裏の史跡公園から本丸まで 15 分で行ける。

シネマパラダイスの復活を

まもなく築百年を迎える高田日活。思えば、初めてこの建物の存在を知ってから、まだ十年に満たないのです。高田生まれとはいえ、幼い時分の私にとって、本町五丁目より先は別世界だったから。上越に戻って十年あまり、歴史的な建物への関心が町家の保存活用と結びつき、雁木と一体になった高田のまちに賑わいを取り戻したい。そんな想いで地元の方々や有志の人々と語りながら、今日ではこの魅力的な界隈が仕事と活動のフィールドとなっています。高田日活もその目玉の一つ…。

まずはその外観。上から波トタンを被せていますが、格好は昔の図面とほぼ同じまま。雁木通りの導入口からすこし奥まった本館まで、現在と同じような細い路地でつながっていたのでしょう。いきなり玄関ドアを開けて入るよりも、「これから映画を見るんだ」という期待が膨らみます。何といっても、映画は庶民の娯楽の花形でしたから、奥まった敷地の制約を逆手に取った仕掛けかもしれません。大正五年の改装当初の世界館は、雁木と町家の続く北国街道筋に突如現れた《白亜の殿堂》だったのです。地元の大工や左官職人が、流行の洋館の写真を見ながら腕を振るったことでしょう。装飾的な窓枠や軒飾りにその痕跡が窺われます。

内部も大正浪漫の雰囲気が漂っています。円柱の柱頭装飾や二階席の緩いカーヴ。ワニス塗り木板天井の中心飾りは、榊原家の家紋である源氏車の漆喰彫刻。アールデコ風のシャンデリアを吊下げたら似合いそう。映画上映だけでなく、ちょっと手を加えて二百席のミニシアターや演芸場としてもお洒落な空間です。置きコタツのある映写室には古いフィルムのブリキ缶が山詰みで、二台の映写機には真空管が使われていると聞きました。

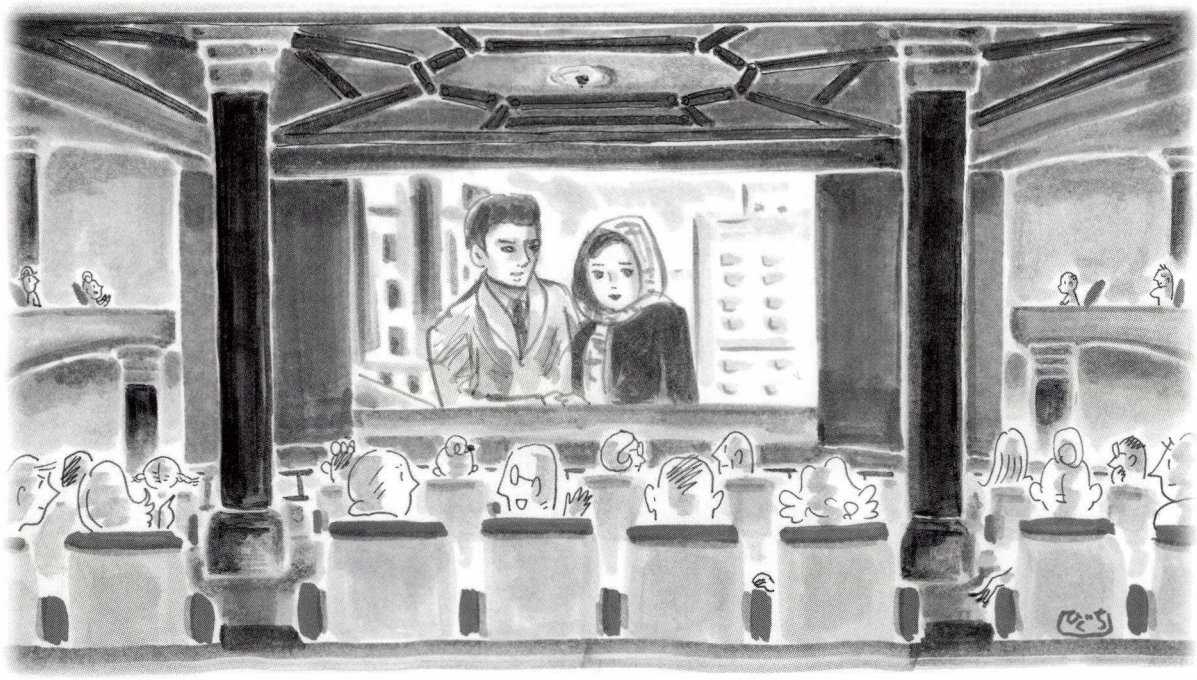
ここ数年は《景観劇場》として様々なイベントが行なわれて、高田日活の再評価につながってきました。向かい側の旧小妻屋は町家交流館「高田小町」に生まれ変わって一年。明治大正昭和の風景がパッチワークのように重なる雁木沿いには、若者の劇団「ガテンボーイズ」の劇場も誕生しました。しかし、「いつもは成人映画だから入りにくい。何となく、古ぼけて薄汚れた印象は近寄りがたい」という声も事実です。単純に古い建物を残すのでもなく、その歴史を抹消するのでもなく、百年の歴史を継承しながら、そこに新しい役割を見出していきたいものです。

映画でさえ、ネット配信される時代にあっても、わざわざ出かけてお付合いを楽しみたい場所。雁木と町家でつながる界隈、雁木伝いに暮らしていける中心街で、「まちの賑わい」を生み出すサロンになることを願っています。そして、いつか日本中の映画ファンが集う場所になることを…。

日々の暮らしの中に、流行の娯楽、「活動写真」が定着した時代の雰囲気を伝える建物は、もう一度「世界館」と呼びたい気持ちで一杯。昔見たイタリア映画、ニューシネマパラダイスを想いだします。あのパラダイス復活の舞台はシチリアの抜けるような青空でしたが、深々と降り積もる雪景色に浮かぶパラダイスも夢のような世界でしょう。

今回のイラスト（ひぐちきみよ）は、懐かしの名画「君の名は」の有名な数寄屋橋シーン。ここで上映された。

明治44年の新築（当時は劇場「高田座」）。大正5年、活動写真の「世界館」に改装。（参照「直江の津」２００８年夏号）平成13年8月に「景観劇場」と銘打ち、ニューシネマパラダイスが上映されて以来、まちづくりと保存活用の動きが始まる。建物の改修と「まちなか映画館」としての活用を目的として募金を呼びかけている。素敵な絵葉書の購入で協力できる。



文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

「さよなら寿司」そのⅡ

「豊饒の海」を前に漁師ゼネスト

―日本の漁業は誰が守るのか―

上越産業振興研究所　所長　横山由雄



史上初！　漁師のゼネスト

二〇〇八年七月十五日、日本全国の漁船二十万隻が史上初めて一斉に休漁しました。独立心が強く、職人肌の漁師の世界で、いわば「ゼネスト」が行われたのです。

メディアはその原因を一様に世界的な原油高だと報じました。その上で「苦しいのは漁業だけではない。運輸もタクシーも同じだ。漁師だけに燃料費を補助するのは不公平」とコメントし、一方で「補助金漬けでは問題を先送りするだけ。力のない一部漁業者が淘汰されても経済的原則で止むを得ない」との突き放した評論も聞かれました。しかし今回の原油高が漁業危機の主因ではありませんし、既に二〇年前からはっきりしていた日本漁業衰退の深刻度は他業界の比ではありません。淘汰縮小どころか、消滅の可能性もあるのが日本漁業だからです。一連の報道には経済的視点だけでなく、日本の魚食文化の希少性を歴史的にとらえ、その上で日本の水産業の再生を考えるという視点がほしいと感じました。



ドロエビの商品化

かつて「ドロエビを商品化したのは私だ」という話をご本人から拝聴する機会がありました。ドロエビはその名の通り体は茶褐色で、水揚げしてから数時間で灰色っぽく変色してしまうため「色が汚い」という汚名を着せられ市場に出回ることなく「雑魚」として扱われてきました。しかしその味は超一級で、甘エビよりも甘く、軽くあぶって殻付きのままいただくドロエビは正に絶品です。たまたま漁師さんからいただいたドロエビの美味さに

感激し顔見知りのホテルや料亭に紹介したことから晴れて商品として日の目を見ることになったとのことでした。外訪者が地元漁師に新たな選択肢を示した事例と言えるでしょう。

漁業関係者の新しい挑戦

この八月、長崎市と漁業関係者が底引網漁の再生を目指して「珍魚試食会」を開催し、参加した市民から「馴染みのない魚もおいしく、市場に出回っている魚に負けていない」と好評だったといいます。「雑魚」の商品化に取り組んでいる例です。

兵庫県洲本市では「漁師体験ツアー」に小中学生五三人が参加し、漁船に分譲し刺し網を引揚げ、獲れた魚を氷詰めにする作業などを体験しました。グリーンツーリズムならぬブルーツーリズムへの挑戦です。子供の頃から漁業に関心を持ってもらう試みは、漁業再生の道につながっているはずです。

茨城県日立市ではこの秋、漁業就業支援フェアを開催し「本気度」に応じて採用を前提とした研修を行う計画をしています。

上越の漁協訪問

上越地域の漁協も新たな方策ということでは苦慮しています。「うちは縮小均衡するつもりはない。減船もしない」と言い切る強気の漁協もある一方で、「現状維持で精一杯。燃料補助ができないのなら組合員は船を下りるしかない」という漁協もありました。

漁師が受け取る魚の代金は小売価格の四分の一といいます。燃料費など経費が増大しても価格決定権はスーパーに握られており、漁師が魚価に転嫁できる仕組みにはなっていないといいます。「魚は日持ちしないので、全量を相対で仲買の言う値段で卸すしかない。仲買にしてもスーパーの仕入れ価格が決まっているのでどうしてみようもない」状況のようです。「長い間の付き合いから、仲買をまたいで消費者とダイレクトにつながることは、信義上からもできない」といいます。

しかし、各地の漁業者や漁協では、前記のように新しい挑戦に踏み切るところも出てきています。漁業就業者のおよそ半数が、既に六十歳以上という年齢構成や、漁業者一世帯当たり年平均二百五十万円という低収入の現状のままでは、年々激減する新規就業者数の改善は困難と言う他なく、近い将来「日本から漁師がいなくなる」というのも可能性ゼロではないかもしれません。

打つ手はあるのか

一連の原油高騰騒ぎの中で消費者が漁業の窮状を感知した今が、漁業者が新たな手を打つチャンスではないかと思います。漁業当事者が一番強く感じている通り、手をこまねいている時間はもうありません。

地域の主婦や女子高生向けの「魚教室」、個人や食堂など消費者との直結ルートの開拓、インターネットの魚宅配や、学校給食の魚料理などを積極的に進めたらよいと思います。日本固有の魚食文化を守る意識を盛り上げることが何より大だと思います。

おわりに

「豊饒の海」と称えられた日本の海。地球上で唯一、文明化をまぬがれてきた海に、いつの時代も人は憧れ、畏怖し、気まぐれに与えられる海の幸を口にしてきました。二百海里に日本が「専有する」海の広さは世界で六番目、体積では四番目です。亜寒帯から亜熱帯に位置する日本の海には、北方性から南方性の魚介類に加え、湖の淡水性の魚介類を含めると三千種類以上が生育している、世界でもまれな国です。この広く深い海を持つ日本の漁業は莫大な国民の共有財産です。豊饒の海を持つ国民として、四季折々の魚介類をたくさん食べることが日本古来の健康長寿の魚食文化を守ることにつながります。日本の漁師をこれほどまでに追い込んでしまった私達にも今ならまだ、魚食文化に思いを馳せ、少し行動を変える時間は残されています。

がんばれ、漁師！



アルバムの一枚

古城界隈の昭和









昭和三十三年に河口分離による直江津港の大改修が始まると、それにあわせて港町の大区画整理事業が開始されました。

旧国道八号線は幅一六メートルで二倍の広さに、大潅・直江津線も一一メートルに拡幅・舗装されました。また一八メートル幅の国道三五〇号（港源入線）を開設し、新たにみなと橋が架けられました。この事業で五〇〇戸以上の家屋の移転がありました。

写真は昭和三十四年頃に撮影されたもので、古城橋の北詰の通勤風景です。橋を渡って行く人、来る人、荷役の女子衆の姿も見えます。もう一枚は、買い物帰りの女性でしょうか、昭和三十年代ののどかな風景です。

バスの後姿が見えるのは、古城公園のある辺りで、車がすれ違うこともできません。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

編集作業の都合で、発行が遅れたことをお詫びいたします。

私たちが、頚城平野の「自然」と感じているものが、じつは縄文時代から、ここに住む人々の手によって作られてきた自然であった。そこから見えてくるものは、次に繋ぐために途絶えさせてはならないものだと、痛切に感ずる。

第8巻4号　12月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」秋号
第八巻三号　通巻三十一号
発行日／平成二十年九月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二―一―八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三―九―五
〒九四三―〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津



発行／平成二十年九月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)